

第1回 在宅療養を支えるスタッフのための多職種連携研修会
—医療と介護の連携・協働を目指して—

1 テーマ

医療も介護も「ごちゃまぜ」で顔の見える関係を作ろう

2 目的

医療や介護が必要になっても、高齢者の誰もが安心して住み慣れた地域で、人生の最期まで自分らしい暮らしを送るためには、在宅療養を支える医療・介護関係者のスムーズな連携と支援が必要です。

本研修会では、在宅医療や介護に携わる多職種のスタッフが、お互いを理解し、顔の見える関係を築くことの必要性を理解し、実践につなげることを目指します。

3 目標

- (1) 新たな顔の見える関係性を築くことができる
- (2) 自分の職種の視点での考えや行動の根拠を説明できる
- (3) 自分以外の職種の視点での考えや行動について理解を深めることができる
- (4) 多職種連携コンピテンシーを1つ列挙できる
- (5) 研修での気づきや学びを実践につなげることができる
- (6) 参加してよかった、楽しかったと言える

4 日時

令和5年1月20日（金）18：30～20：00

5 方法

Zoom ミーティングによるオンライン研修

6 対象

医師、歯科医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、歯科衛生士、ソーシャルワーカー、ケアマネジャー、ホームヘルパー、リハビリスタッフ、介護職員、生活支援コーディネーター、医療・介護事務職員、行政職員、その他医療・介護に携わる方なら誰でも

7 講師

宮崎大学医学部 地域医療・総合診療医学講座 教授 吉村 学氏

8 内容

(1) ブレイクアウトセッション

- ①自己紹介
- ②ロールプレイ（事例を用いた多職種カンファレンス）
自分の職種以外の役を演じることをルールとし、退院前カンファレンスを再現する
- ③演じてみた感想の共有

(2) レクチャー

- ①事例のその後の物語
- ②6つのコンピテンシー
- ③多職種連携のコツ

9 プログラム

時間	内容
1830-1835	開会の挨拶 呉市医師会副会長 呉市在宅医療・介護連携推進検討委員会 委員長 石井外科診療所 院長 石井 哲朗 先生
1835-1840	吉村先生自己紹介・本日の目標など
1840-1845	BS1 ブレイクアウトセッション：自己紹介
1845-1850	事例紹介
1850-1855	人物説明
1855-1910	BS2 ブレイクアウトセッション：ロールプレイ
1910-1915	吉村先生からインタビュー（1チーム）
1915-1925	BS3 ブレイクアウトセッション：感想共有
1925-1935	吉村先生レクチャー①：その後の物語
1935-1945	吉村先生レクチャー②：6つのコンピテンシー
1945-1950	BS4 ブレイクアウトセッション：全体感想共有
1950-2000	吉村先生レクチャー③：多職種連携のコツ
	閉会の挨拶 呉市高齢者支援課 課長 田中 玲子

10 参加者数 60名

職種内訳：医師8名，看護師15名，保健師4名，薬剤師1名，ケアマネジャー17名，ソーシャルワーカー3名，社会福祉士4名，リハビリスタッフ（PT,OT,ST）3名，介護職員2名，医療・介護事務職員2名，その他1名

11 アンケート（別紙1参照）

- ・今回の研修の満足度について，回答者の全員が「満足」「やや満足」と回答。
- ・基調講演の理解度について，回答者の全員が「よく理解できた」「理解できた」と回答。
- ・ロールプレイ及びグループワークの時間について，回答者の約6割が「短かった」と回答。
- ・「新たな顔の見える関係性を築くことができたか」に対して，回答者の約8割が「できた」「ややできた」と回答。
- ・「自分以外の職種への理解を深めることができたか」に対して，回答者の約9割が「できた」「ややできた」と回答。
- ・「今後の業務に役立つと思うか」に対して，回答者の約9割が「大変役立つ」「役立つ」と回答。

12 考察

今回の研修会に対する満足度は高く、「楽しかった」「参加してよかった」「他職種への理解が大事」という声が多かった。しかし，研修会の目標である「新たな顔の見える関係性を築くことができたか」「自分以外の職種への理解を深めることができたか」に対して，回答者の約1～2割が「あまりできなかった」と回答している。原因として，自己紹介をはじめとするグループセッションの時間が短く，グループの中で“やりとり”が十分にできなかったことが考えられる。今後は，参加者同士が交流を深め，ディスカッションが十分に行えるようにグループワークの時間設定を行う。

また、「医師との連携の難しさ」「情報共有の課題」「他職種で話す機会がない」など，普段の業務で感じる多職種連携における課題も多く聞かれた。多職種連携研修会や顔の見える関係づくりへのニーズも多いことから，多職種連携に対する関心や意識の高さが窺える。今後も，患者・サービス利用者・家族のために，互いに働きかけ，日々の業務の連携・協働につながるような研修会や交流会を行うことが必要であると考えられる。